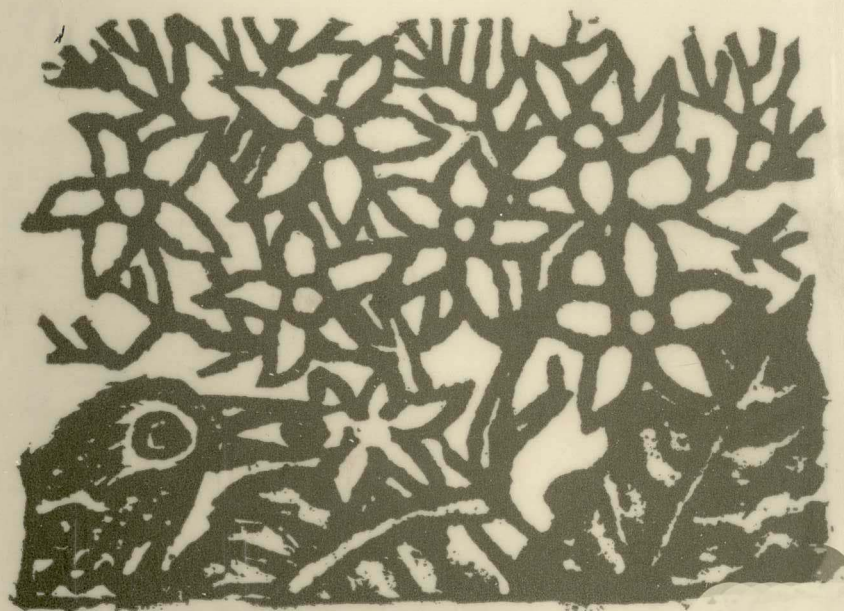


土屋文明百首

小市巳世司編



短歌新聞社

小市巳世司編

土屋文明百首



短歌新聞社

土屋文明百首

平成2年7月5日初版発行

平成3年2月14日五版発行

編 者 小 市 巳世司

発 行 者 石 黒 清 介

印 刷 所 有 限 会 社 ニ ッ カ

発 行 所 短 歌 新 聞 社

〒166東京都杉並区高円寺南4-43-9

振替口座 東京5-21683

TEL (03) 312-9185

定価2000円

(本体1942円)

ISBN 4-8039-0606-8 C0092 P2000E

序

去年（一九八九）の九月十八日に土屋文明は満九十九歳になった。世にいう白寿である。十月末頃であつたろう。短歌新聞社の石黒清介氏から話があつて、土屋先生の生誕百年を祝つて「土屋文明百首」という本を出したい。「ふゆくさ」から「青南後集」までの全作品から百首を選んで、アララギ会員三十人ぐらい、それに歌壇から若干の応援を得て、解説と鑑賞を加えるという企画だが、その編集を頼むというのである。土屋先生は常々派手なことはあまり好まないようだが、百歳の祝ともなれば、そう無下に却けるということもないのではあるまいか。それに、ただのお祭騒ぎと違って、この度の企画のような形で祝うことが出来るならば、先生に教を受けた我が人にとっては頗る有難いことでもある。お断りする理由はないように思われた。

1
ところで、話が進むうちに石黒氏の意見が少し變つて、現在アララギに属している百人で百首を分担することになった。その方が純粹だし、そうなれば一人でも多くの人々が参加した方がよい。それに、日頃とかく引つ込み思案で怠りがちな我々アララギ会員には勉強のよい機会でもある。言われてみれば至極尤もで、出来ればそれに越したことはない。ただ、三十名ぐらいならと

にかく、百名となると、同じアララギ内のこととは言え、見聞の狭い私としては正直言つて荷が重く不安であつた。実際、今から考えると、もっと慎重に時間をかけて、遺漏のないような人選を心掛けるべきであつた。これは執筆者の場合だけでなく、そもそも作品の選出についても同じことが言えるであらう。

「ふゆくさ」から「青南後集」まで、明治四十二年から昭和五十八年まで七十四年間にわたる老大多彩な作品群の中から百首を選出することは、実際やってみると、あれやこれや、いろいろ迷が生じて、決して簡単なものではない。その上、文明の場合は特に、多く連作の形を取っているから、一首一首独立しているものに就いても、一首だけ取り出すのと連作の中に置いたのとでは、やはりいろいろな点で微妙な違いがあるという特殊な事情があつて、それが一層選出をむずかしくしていることは否めない。実は数年前、角川書店の「短歌」の文明特集号に百首選を載せたことがあり、今度機会があつたら今少し満足のいくようにやり直すつもりであつた。ところが、今回は折角の機会なのに、その暇がなく、また、こうした企画にはそれに相應しい選び方が別にあつていい筈だが、結局前回の百首選に少しかり手直しするだけで終つてしまった。

こういう次第で、作品の選出も執筆者の人選も決して十全を尽したものとは言ひ難いけれども、これは今更何ともいたし方のないことと思うより他にない。ただ、どの歌を誰にお願いするかについては多少の配慮をしたつもりであるが、勿論これとて限度のあることであつた。

そうした編者の不明や力不足による不十分な点はあっても、土屋先生の作品に先生を親しみ仰ぐアララギ会員が一九〇年になって立ち向かうことは、今までないことであり、それ自体意味のあることだと言つてよいかと思う。土屋文明は際立つて強烈な個性の持主であるが、その強烈な個性を以て、絶えず自分の道を切り開いて来た努力は、これまた並々でないように思われる。文明の独自の世界は、従つて、なまはんかの理解を寄せつけないところがある。そういう点では、今回我が何処まで先生の作品に迫り得るか、かえりみて甚だ心もとなさを覚えないうけにいかない。しかしまた、土屋文明の世界は、我々平凡な生活者の心に深く結びついておつて、高踏的な文字の遊びからは最も遠いところにあるから、その点では我々も心を安んじて先生の作品に立ち向かうことが出来る筈なのである。

先生は今年九月、いよいよ満百歳になる。去年の三月、急に病變を来し、アララギ四月号に欠詠した時には、我々を大いにびっくりさせたけれども、幸いペースメーカーのお蔭で事無きを得、欠詠も一月だけで済んだ。作歌は今年も続いている。健康状態は特に何処が悪いということはないようだが、何と言つても高齢である。ただ、作歌を離れぬ生活の一日も長からんことを大方の皆さんと共に祈りたく思ふばかりである。

一九九〇年二月三日

小市 巳世司

凡例

一、本書は土屋文明の短歌作品百首に、アララギ会員百人が一人一首宛分担して、解説と鑑賞を試みたものである。

一、作品の選出及び排列はそれぞれ第一歌集ふゆくさ以下、往還集、山谷集、六月風、少安集、山の間の霧、葦菁集、山下水、自流泉、青南集、続青南集、続々青南集、青南後集に至る全十三歌集（七頁 歌集一覧表参照）の年代順による。

一、本文のそれぞれ初頭に掲出した百首歌の表記は、岩波文庫本の自選「土屋文明歌集」所収のものは振仮字など全てそれに従い、収録外のものとは原歌集に拠った。但し、漢字は原歌集の正字に戻すのを原則とした。目次及び文中引用の百首歌は振仮字は省略或は簡便に従い、漢字も現在通用のものをを用いた。

一、仮字遣は短歌作品は歴史的仮字遣を用いたが、文章は現代仮字遣によった。引用文の歴史的仮字遣のものは勿論原文のままである。

一、文中の人物、就中土屋文明及びその近親等に対する敬称は執筆者によって、あるものないも

の様々であるが、何れも原文のままである。

一、作品の選出は編者が行った。但し、執筆者の意向によったものが、何首というほどもないが、若干ある。

歌集一覽

- 7
- 一、ふゆくさ 大正14年2月 古今書院刊 所収自明治42年至大正13年 三百八十首。
 - 一、往還集 昭和5年12月 岩波書店刊 所収自大正14年至昭和4年 六百四十九首。
 - 一、山谷風 昭和10年5月 岩波書店刊 所収自昭和5年至9年 八百五十二首。
 - 一、六月風 昭和17年5月 創元社刊 所収自昭和10年至12年 五百六十六首。
 - 一、少安集 昭和18年6月 岩波書店刊 所収自昭和13年至17年 八百八十一首。
 - 一、山の間の霧 未刊 昭和17年より19年に至る抄録を昭和27年9月白玉書房刊の同名の歌集中に収める。
 - 一、葦菁集 昭和21年7月 青磁社刊 所収昭和19年 五百四十七首。
 - 一、山下水 昭和23年5月 青磁社刊 所収自昭和20年至21年 七百九十七首。
 - 一、自流泉 昭和28年3月 筑摩書房刊 所収自昭和22年至26年 千二百四十首。
 - 一、青南集 昭和42年11月 白玉書房刊 所収自昭和27年至36年 千三百五十八首。
 - 一、続青南集 昭和42年11月 白玉書房刊 所収自昭和36年至41年 千四百十五首。

一、続々青南集 昭和48年7月 白玉書房刊 所収自昭和42年至48年 千二百九十二首。

一、青南後集 昭和59年7月 石川書房刊 所収自昭和48年至58年 千二百八十五首。

右の他に、次の自選歌集がある。

一、放水路 昭和11年11月 改造社刊 「ふゆくさ」「往還集」「山谷集」より六百二十一首収録。改版 昭和24年7月 八百十六首収録。

一、新選土屋文明集（新潮文庫） 昭和15年2月 新潮社刊 「アララギ年刊歌集」「山谷集」「往還集」「ふゆくさ」より九百八十一首収録。

一、ゆづる葉の下 昭和21年5月 目黒書店刊 「六月風」と「少安集」より四百九十四首収録。改版 昭和28年1月 八百二十二首収録。

一、山の間の霧 昭和27年9月 白玉書房刊 未刊の「山の間の霧」「葦青集」「山下水」より七百八十九首収録。

一、土屋文明歌集（角川文庫） 昭和30年8月 角川書店刊 自選歌集「放水路」「ゆづる葉の下」「山の間の霧」を収録。二千四百二十七首。

一、土屋文明歌集（岩波文庫） 昭和59年3月 岩波書店刊 自選歌集「放水路」「ゆづる葉の下」「山の間の霧」及び「自流泉」「青南集」「続青南集」「続々青南集」「青南後集」より

合計二千二百六十首収録。

『土屋文明百首』

索引

この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝はひらかず（ふゆくさ）

うらぶれて草吹く風に従はば吾は木の間にかくろひなむか

夕ぐるるちまたゆく人もの言はずもの言はぬ顔にまなこ光れり

おとろへて歩まぬ吾児を抱きあげ今ひらくらむ蓮の花見す

休暇となり帰らずに居る下宿部屋思はぬところに夕影のさす（往還集）

ただひとり吾より貧しき友なりき金のことにて交絶てり

銭湯に子等つれいでて東京の蟬の静かなる声に気づきぬ

父死ぬる家にはらから集りておそ午時に塩鮭を焼く

代々木野を朝ふむ騎兵の列みれば戦争といふは涙ぐましき（山谷集）

罪ありて吾はゆかなくに海原にかがやく雪の蝦夷島は見よ

わが妻は蚊帳と布団と買ひて来ぬ今日夏物のやすくなれりと

木場すぎて荒き道路は踏み切りゆく貨物専用線又城東電車

夕日落つる葛西の橋に到りつき返り見ぬ霧の中にとどろく東京を

小工場に酸素熔接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむとす

枯葦の中に直ちに入り来り汽船は今し速力おとす

たくましき大葉ぎしぎし萌えそるふ葦原に石炭殻の道を作れり

無産派の理論より感情表白より現前の機械力専制は恐怖せしむ

ひめうづの早き芽集めつつ思ふ一人ぐらゐは仕合になる人なきか（六月風）

六月の疾風は潮を吹き上げてはや黄に枯るる蒲なびくかも

まをとめのただ素直にて行きにしを囚へられ獄に死にき五年がほどに

吉田正俊……………六

長森光代……………八

小市草子……………三〇

小金井つや子……………三三

長崎津矢子……………四四

中島栄一……………六六

岩田叶子……………六八

萩原千也……………七〇

宮地伸一……………七三

扇畑忠雄……………七四

鈴木登代……………七六

新貝雅子……………七八

逸見喜久雄……………八〇

大橋栄一……………八二

斎藤彰詰……………八四

佐々木忠郎……………八六

松野谷夫……………八八

扇畑利枝……………九〇

山中清一……………九三

浅井俊治……………九五

高き世をただめざす少女等ここに見れば伊藤千代子がことぞかなしき
 溝清く家に引き入れて住みたれど乏しきかな沈みたる馬鈴薯の

露はれて円かなる巖の頂に円かなる石を置く手にも取るべく

李の木の下に安らに枕置き筵に人のかへることなし

霧を吐く清きたぎちの石の上客を送りて礼する法師

たまきはる吾が齢は知らず立ちかへりひとり声よぶ枯草の崎（少安集）

この海を左千夫先生よみたまひ一生まねびて到りがたしも

天地のまにまに遊びたまはむに障り多くしてすぎ給ひける

この母を母として来るところを疑ひき自然主義渡来の日の少年にして

弟子運よき先生なりきと言へるとき会衆の一人笑ひて立つ

右乳の下を撫でよと吾に言ふ吾は撫づ五つ頃の心になりて

一生の喜びに中学に入りし日よ其の時の靴屋あり吾は立ち止る

唯真がつひのよりどとなる教いのちの限り吾はまねばむ（山の間の霧）

とりよろふ常なる山並の間にして一朝の霧過ぎにきと言へ

方を劃す黄なる臺の幾百ぞ一団の釉熔けて沸ぎらむとす（韭菹集）

うさぎ馬煤を車し来るなり煤より黒くして眼あるもの

朝より鋭きを国の音声とも壁に住む者のこだまともきく

横はる吾は玉中の虫にして琥珀の色の長き朝焼け

高粱を前にしやがめる全裸人文字発明の朝思はゆ

道のべに水わき流れえび棲めば心は和きて緩遠にあり

金子	高木	伊藤	吉田	雁部	小谷	猪股	進藤	高木	安達	落合	小市	川村	中島	石井	宮本	横山	柴田	堀田	長田
阿岐夫……………	善胤……………	安治……………	漱……………	貞夫……………	稔……………	静弥……………	久義……………	佑八……………	龍雄……………	京太郎……………	巳世司……………	和夫……………	英子……………	登喜夫……………	清胤……………	季由……………	小夜子……………	清一……………	雅道……………
四	三	六	八	六	四	三	六	六	三	四	三	七	六	六	四	三	六	六	六

箱舟に袋も豚も投げ入れて落ちたる豚は黄河を泳ぐ

北京城はなにに故人にあらなくに涙にじみて吾は近づく

朝よひに真清水に採み山に採み養ふ命は来む時のため(山下水)

出で入りに踏みし胡桃を拾ひ拾ひ十五になりぬ今日の夕かた

霜いくらか少き朝目に見えて増さる泉よ春待ち得たり

走井に小石を並べ流れ道を移すことなども一日のうち

石一つ腰をおろすに余りあり下ゆく水の声はよろこぶ

目の下に釣橋ひとつ見え居りてただ世の中につながりをもつ

甘草も未だ飽かぬに挙り立つ浅葱の萌えいづれを食はむ

にんじんは明日蒔けばよし帰らむよ東一華の花も閉ざしぬ

相抱ける二人海に向き石をなぐ吾より四十米かなたの世界

燕の子こころみに羽根をのばす下足を投げ出す娘等三人

ただ饑ゑてすぎし一年と思はめや一つ言葉に語りぬる

初々しく立ち居するハル子さんに会ひましたよ佐保の山べの未亡人寄宿舎

時代ことなる父と子なれば枯山に腰下ろし向ふ一つ山脈に

雨戸あけて吾は聞き居り月いづる山にかへるらしき狐のこゑを(自流泉)

道草の枯るれば白き石の面故人のごとく吾が前にあり

集りて立つ人間等生きて居り足々みだれ狸横はる

大阪に丁稚たるべく定められし其の日の如く淋しき今日かな

歌の会茶番じみゆくも身につまさる短歌輕蔑論より直接にして

沢 栄 一……………六

角 田 春 三……………六

後 藤 直 二……………一〇

須 永 義 夫……………一〇

笹 原 登喜雄……………一〇

荒 井 孝……………一〇

近 藤 惇……………一〇

古 賀 多三郎……………一〇

小 野 田 勉……………二

狩 野 登美次……………二

大 河 原 惇 行……………二

組 橋 ひさ子……………二

猶 野 耕 一 郎……………三

三 宅 奈緒子……………三

吉 村 睦 人……………三

中 本 幸 子……………三

高 橋 宗 伸……………三

清 水 正 男……………三

土 本 綾 子……………三

常 磐 井 猷 磨……………三

六年耕すくぬぎが下の菜畑にかれ葉のこして移り来にけり（青南集）

死後のことなど語り合ひたる記憶なく漠々として相さかりゆく

近づけぬ近づき難きあり方も或る日思へばしをしをとして

白き人間まづ自らが滅びなば蝸牛幾億這ひゆくらむか

ああ樂し老の見世物のごとくにて若き君等の写真器の前

四つ目通りに地図ひろげ茅場町さがしたりき四月の十日五十年前

旗を立て愚かに道に伏すといふ若くあらば我も或は行かむ

朝市の車に並び馳せたりき地下足袋の触感は今に力を与ふ

五万分一図右下の四半分わが恋かかる道に流れに

大雲取の道を我等が為に見てかへる処女は花原の中（続青南集）

大雲取越えて苦しみを残す二人定家四十茂吉四十四

この小川をわたりと強ふる博士たちに加勢して今日は雨が降つてゐる

感動をこえし変化を見下して称へみる茅場町三丁目十八番地

手のくぼの庭を宝と網に刺し土屋先生菜を蒔きて食ふ

阿ねると見るらむまでに従ひき生きてるうちから天飛ぶたましひ

立ちかへり立ちかへりつつ恋ふれども見はてぬ大和大和しこほし

山も川もうつるといへど言葉あり千年を結ぶ言葉をぞ思ふ

上村君老いていよいよ頑固なれど君ありて我が見得し大和ぞ

糟湯酒わづかに体あたためてまだ六十にならぬ憶良か（続々青南集）

青々と藻の伏す磯に来る潮は老いの歩みよりなほ静かなり

富永 宜暢……一六

藤原 哲夫……一六

真下 清子……一六

矢野 伊和夫……一六

藤川 幸助……一六

加藤 淑子……一六

奥山 善昭……一六

北沢 敏郎……一六

平木 次郎……一六

市橋 九郎……一六

新津 澄子……一六

松井 諭三……一六

佐藤 嘉一……一六

楠瀬 兵五郎……一六

山岸 謙藏……一六

添田 博彬……一六

西本 篤武……一六

山村 公治……一六

堺 桜子……一六

杉浦 民一……一六

人体修繕工と歌ひき三十年前今は呼ばむ人間ボンコツ屋
松の間に雨ににほへる山ざくら花は皆これ木花之開耶姫

墨うすくにじむ習字をただに見ぬ一つ机に並ぶ少女を(青南後集)

この道にやうやく歩む汝なりき立ち変るとも道は行くべく

ひ弱く生れ来し汝をここに置き病むこと多く生ひたしめき

三度版になるを喜び三度向ふ三度にしてなほ飽き足らぬもの

読み下さる読み下さらぬかたじけな買ひ下さるを第一として

道の上の笑まひは幻咲く花は今の現に手のうへにあり

命あり万葉集年表再刊す命なりけり今日の再刊

汝がことも夢に見るまで距たりて或は楽し夢の中の遊び

置く毒に中り死にたるゴキブリか後を頼むとわが枕がみ

十といふところに段のある如き錯覚持ちて九十一となる

今日はまた昨日の如く腰おろし今日の心を静めむとする

さまざまの七十年すごし今は見る最もうつくしき汝を柩に

そのあけを少し濃くせ煩くつろぐ老を越え来し若き日を見む

終りなき時に入らむに東の間の後前ありや有りてかなしむ

新しく生れし者を見むと行きき終の短きあゆみとなりぬ

愛で愛でし明石方落ちつつしばし匂ふ魂反れ其のしばしに

木むら若葉花の紅かはるなし亡きを言ふ勿れ春はとこしへ

九十三の手足はかう重いもののか思はざりき勞らざりき過ぎぬ

岸田 隆……二六

告 紀代子……二六

倉林 美千子……二六

松本 東照……二六

和田 俊和……二六

御津 磯夫……二六

山田 平一郎……二六

本間 美鶴子……二六

長谷川 慎吾……二六

実藤 恒子……二六

大谷 光利……二六

小西 邦太郎……二六

富田 重延……二六

代永 續……二六

梅沢 竹子……二六

清水 房雄……二六

坂口 由紀子……二六

白井 登……二六

小出 春善……二六

小暮 政次……二六